

学術祭の演劇と私

- みんな一緒に同じ目標に向かって -

「B-2」グループ， 朴ミナ(パク・ミナ)

1. 演劇のコミュニティの紹介

私にとって大切なコミュニティは「学術祭の演劇とのコミュニティ」です。

学術祭は、韓国にある私の大学の学科で毎年 11 月に行っている行事です。日本語学科なので、演劇や合唱、司会者の案内など、学術祭のすべてが日本語で行われています。

おとし(2011 年)の夏休みの 6 月から 2 学期の 11 月まで、学術祭の演劇の練習のために学校へ行きました。そこには演劇の演出をする先輩と、1 年生の男の学生 4 人と、2 年生の女の友だち 6 人、そして私がいました。

練習は、最初の 1 カ月は即興演技をしていました。即興演技は、ただ台詞や行動で演劇を完成するよりは感情的な部分を中心にして実力を向上し、感情をよく表して観客に分かりやすくするための練習でした。2 人や 3 人グループを作って、先輩が黒板に書いた状況と場所を一つずつ選んだ後、グループで相談してからその場で演技を見せてもらうことです。即興演技が終わった後は、演劇の役割を決めて、みんなテーブルに座って台本を見ながら台詞を覚えました。後は台本を見ないようにして声に感情を入れて演技をしました。次は、学校から舞台がある場所を借りてもらって本格的に行動を練習したり、動線を考えたりしました。

初めは親しくなれるかどうか分からなくてぎこちなかったですが、「演劇」という目標に向かって練習していきながら、みんな「今年の学術祭を成功的にしたい」「長い間練習していたから、みんなにすばらしく見せてあげたい」と思うようになりました。それで団結力も強くなったし、親しくなりました。授業が終わったらみんな集まって、その日の授業や日常での出来事を話し合ったり、練習が終わった後は一緒にご飯を食べたり、カラオケに行って遊んだりしましたので、「学術祭が終わったとしてもずっと仲良く過ごしたい」と思いました。

ようやく学術祭の日になりました。みんな緊張していましたが、お互い「頑張れ！」と応援してくれました。

演劇は成功的でした。緊張してミスもありましたが、みんな慌てずに演劇を進んでいきました。演劇が終わった後、みんなその瞬間を喜んでいましたが、もう終わりだと思って泣いていた人もいました。喜びと悲しさが混ざっていたその瞬間を今までも忘れられません。

学術祭はいい友だちと後輩、人々との団結力、私もできるという気持ちなど、たくさんものを私にくれました。今でもそのときを考えると、「演劇をしたのはいい選択だった」と思うようになります。みんな一緒に一つの目標に向かって、同じ心で何かをすることは人生においていい経験だと思います。

2. インタビュー相手

私がインタビュー相手として選んだ人は二人です。一人は、私と同年で、今私と一緒に秋田に来て留学しているハン・ミニョンさんです。また一人は、一緒に演劇をした同じ学科の後輩であり、演劇をきっかけで付き合いようになって今は彼氏でもあるソン・イン Chol さんです。二人ともそのコミュニティの中で俳優をしていました。

ミニョンさんを選んでインタビューしたい理由は、練習するとき演出する先輩がいない場合はミニョンさんが演劇の練習を担当したこともあるし、演劇の練習から学術祭まで、ほとんどの出来事をよく覚えていると思うからです。イン Chol を選んでインタビューしたい理由は、演劇と一緒にした人々との思い出が多いだろうと思うからです。

二人との思い出の中で特に印象が強かったことは、演劇の練習を本格的に始める前に約一カ月間やっていた即興演技です。各グループの演技を見た後は、何が不足しているのか、何がよくできているのかを互いのために評価し合いましたけど、特にミニョンが評価を詳しく説明してくれたことが印象に残っています。イン Chol さんは、私とよく同じグループになって即興演技をしていたのが印象的です。他には、舞台上でみんなが集まって夕飯のお弁当を食べながらいろいろな話をしたり、台詞の練習をしていたことです。

3. インタビューの結果

私は計画の通り、ミニョンさんとイン Chol さんをインタビューしました。日付は 2012 年 12 月 7 日で、イン Chol さんは「NateOn」というメッセージサービスの画像チャットを通じて約 15 分ぐらいインタビューしました。ミニョンさんとのインタビューは、ミニョンさんの部屋で約 40 分ぐらい行われていました。自分にとって演劇のコミュニティは何かについて、私は「学校と家族以外に、私が所属しているのが感じられるもう一つの集団である」と思いました。イン Chol さんは、「親しみを感じながら過ごしていた日常の中の大きな部分である」と答えました。最初に、ミニョンさんは学科の行事として参加してみただけでしたが、イン Chol さんはこのコミュニティに期待を持って参加したそうです。

演劇が終わった今、そのコミュニティは今も存在するかどうかについて、私を含めた 3 人は「消えたことではない」と思っていました。私は「存在はするが、演劇という団結がどんどん弱くなっているのが消えそうな状態である」と思いました。ミニョンさんは「消えてしまったことではないが、そのコミュニティを作り直すことは無理だと思う。同じ学年の友達とは親しくなるとときどきコミュニティのことを思い出してその記憶を共有しているが、一年生の後輩たちとは演劇という結束力がなくなったので疎遠になったらしい。それが残念だ」と答えました。イン Chol さんは、「今は軍隊や勉強、留学など、みんなバラバラになったが、消えたわけではないし、いつか演劇のコミュニティとして会う機会ができると思う」と答えました。

誰が私たちのコミュニティの本質に一番集中したかについて、インチョルさんは私の考えと同じように「みんな自分の特徴と性格を通じて一生懸命集中してやってくれた」と答えました。ミニョンさんは演出する先輩のいい性格とリーダーシップのおかげでみんな練習に集中できたと答えました。

コミュニティのため日常に邪魔になったことは何かについて、私は特別にないと思いましたが、インチョルさんは試験勉強がうまくできなかつたし、夜遅くまで練習をしたので疲れていたと答えました。

コミュニティの中でうまくできなかつたことは何かについて、私は時々誰かが遅刻をしたり、先輩のコメントが理解できなくともっといい台詞や行動を見せられなかつた人がいたということだと思いました。ミニョンさんは「最初に一年生の後輩たちとの関係があまりよくなかつたこと(取っ付きが悪い、遅刻など)と、演技についての先輩のコメントを上手に受け入れられない人がいて大変だった」と答えました。

毎年私たちの学科で学術祭の演劇をしていた他の演劇のコミュニティに比べて、うちのコミュニティは何が違うかについてミニョンさんは「学術祭の演劇というのは、台詞と行動があれば一応できるものである。しかし、うちのコミュニティは真の演劇をするために感情的な部分に焦点を当てていたと思う。それでお互いに自分の考えや性格、姿などをありのまま見せることができたので、強い同質感を持って練習ができたと思う」と答えました。

4. 演劇のコミュニティと私

インタビューを通じて、私は「自分にとってなぜそのコミュニティが大切なのか」を考えてみました。私は気が小さい性格なので、人の前で自信を持って何かを見せたことがあまりありませんでした。それで、大学に入ったら何か意味の深いことをやりたいと思っていましたが、先輩や後輩、先生と親しくなる方法も分からなかつたので、どうしようもない状態でした。しかし、2年生のとき学科の学術祭の演劇をしたい人を募集するという連絡をもらって「いよいよ何かをする機会が来たから、やってみよう」と思って、インチョルさんの考えと同じように「期待を持って」チャレンジしてみました。

コミュニティを通じて私の恐れはどんどんなくなりました。コミュニティの中で先輩と後輩に会って親しくなつたこと、ただ大学に通うのではなく学科の行事に参加してみたこと、舞台の上で多くの人に今までの努力を見せることは私にとって大切な経験でした。演劇のコミュニティは、私が日本語学科という大きなコミュニティに所属しているということをよく知らせてくれたし、小さな社会生活を経験させてくれました。私と私の生活にたくさんの変化を与えてくれたので、演劇のコミュニティは私にとって大切なことです。

学術祭の演劇が終わって一年が過ぎました。今はみんな自分の目標に向かって各自の位置で頑張っています。私がこれからも演劇のコミュニティを守っていきたい理由は、私たちはただ演劇のために集まったわけではないと思うからです。せめて私にとってはそれで

す。演劇の話だけではなく、お互いに学校生活についてのコメントをしてくれたし、コミュニティの誰かに悩みがあったら一緒にそれについて考え込んでくれたし、演劇で不足しているところはみんなで力を合わせて解決したなど、学校での家族のみみたいな存在でした。インタビューでインチョルさんが言及した「日常の大きな部分」というのは、私がコミュニティについて感じていることに似ているところだと思います。

このコミュニティをこれからどんなふうに生きていきたいかについて考えてみると、ミヨンさんがインタビューで言ったように「作り直すのは難しい」と思います。演劇をもう一度することがないなら作り直すのはできないが、インタビューのインチョルさんの答えのように「各自の生活の中でみんな集まって」コミュニティでのみんなの目標を達成したことを続けて記念したり祝ったり、演劇の思い出を話したりするのはできると思います。

一年生の後輩たちは軍隊に入っているし、私の友だちは勉強や留学をしていて今はみんな忙しいですが、SNS や電話で連絡をとったり日付を決めて会ったりしてこのコミュニティを有志することができると思います。

5. クラスについての感想

この授業を受ける前には、コミュニティというのは私にとって堅苦しいキーワードだと思っていました。しかし、最初の授業で、グループを作ってコミュニティとは何かを話し合ったとき、グループの人とコミュニティについて自分が持っている知識を共有しながらその定義が分かるようになりました。そして、多くのグループからコミュニティのいろいろな意味が出てくるのを見、それを読んで勉強しながら、コミュニティというのは私が思ったより難しいのではないことを分かりました。

コミュニティとは何かを勉強してそれで終わることではなく、みんなはどんなコミュニティがあるのかを書いて、それを一緒に共有しながら読んだのもよかったと思います。それを通じて、「こんなコミュニティもあるんだ」「本当に、大切に見えるコミュニティだね」など、いろいろなことを感じました。

授業は全体的によかったですが、昼ご飯を食べながら他の人のコミュニティの紹介文を読んだりその説明を聞いたりしたのは、集中ができなかったのであまりいい方法ではなかったと思います。そして、説明をしている人にも迷惑になりそうだとも思いました。そして、初めから終わりまで同じグループで活動をするよりは、毎週他の人とグループを作って紹介文についてのコメントをもらったりいろいろな話をしたりするのがいいと思います。

コミュニティについてよく分からなかったですが、この授業を通じてやったことがずいぶん勉強になりました。ありがとうございます。